

たゞ一人だけ紋付に袴、雪駄を突っかけて居るのがある。來がけに同船したNである。

金時のやうな髪を一振り振つて、仙臺平をシューシューさばいて進み出ると、主人側の大使館員や其の夫人達が妙な顔をするのが明かに分る。實をいふと當日集つた同胞諸君のモーニング姿が、大して恰好の好いものでもないのだし、殊に夫人達の裾短に着た洋服は町の小學校の上級生の中から、榮養不良や發育不完全なのを狩出して來た位しか當人達を引立てぬのだから、風態の上からいへば、羽織や裾模様の方が遙に勝れて居るのだが、そこは西洋人が日本に來て、シャレ氣味で和服を着て見るとは違つて大々の眞面目で着込んだ洋服のことでもあり、またかくして立派に西洋人乃至巴里ッ兒になりすまして居る積りでもあるのだから、Nのやうな奴が現はれて來ると、眞面目の着物がシャレに見えてそのシャレ氣味にムカ／＼するのも無理からぬ次第だ。一順拜賀がすむと持ち出される三鞭酒の杯を擧げる。餘り遠慮して居るのもない様だが大して聲を立てるものもない。

いさゝかだれ氣味を感じた瞬間に、コップの無い方はどうか仰しやつて下さいと、高くも低くもない調子で或る書記官が叫ぶ、俄にガヤ／＼して二杯目に有りつく横着者もあつて、急に沈滞の氣が動き出して來る。うまい時にうまいことをいふものだと一寸感心した。自分は元來雜煮は好かないが、おい雜煮を食ひに行かう、正月じやないかと誘はれるままに、六七人一緒になつて町端まちばたれの日本人俱樂部に行く。

俱樂部といつても倫敦のやうに大きい建物ではなく、三四十人も繰り込めばもう一杯になる。いち早く食堂に入り込んで茶碗をかきまわして居るのもある。『僕は雜煮は好かんが』など、自分と同じやうなことをいうて、その癖頻に順番を待つて居るのもある。好かぬ雜煮を無理にも詰め込んで正月氣分を呼び起す積りらしい。